

Tchaikovsky

PIANO CONCERTO NO.1

Rachmaninov

PIANO CONCERTO NO.2

Hiroko Nakamura

THE STATE
SYMPHONY ORCHESTRA
OF RUSSIA

EVGENY SVETLANOV



チャイコフスキー:ピアノ協奏曲第1番
ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第2番

中村絃子

チャイコフスキー

Pyotr Ilyich Tchaikovsky (1840-1893)

ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

Piano Concerto No.1 in B-flat Minor, Op.23

- ① 第1楽章:アレグロ・ノン・トロツポ・エ・モルト・マエストーソーアレグロ・コン・スピリト (20:09)
I. Allegro non troppo e molto maestoso-Allegro con spirito
- ② 第2楽章:アンダンティーノ・センブリーチェ (6:46)
II. Andantino semplice
- ③ 第3楽章:アレグロ・コン・フォコ (6:56)
III. Allegro con fuoco

ラフマニノフ

Sergei Rachmaninov (1873-1943)

ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18

Piano Concerto No.2 in C Minor, Op.18

- ④ 第1楽章:モデラート (11:07)
I. Moderato
- ⑤ 第2楽章:アダージョ・ソステヌート (10:42)
II. Adagio sostenuto
- ⑥ 第3楽章:アレグロ・スケルツァンド (11:30)
III. Allegro scherzando

(Total Playing Time: 67:16)

中村絃子(ピアノ)

Hiroko Nakamura, Piano

エフゲニー・スヴェトラノフ(指揮)

Evgeny Svetlanov, Conductor

ロシア国立交響楽団

The State Symphony Orchestra of Russia

[録音]1990年5月23日、東京、サントリーホール (①-③)、1990年5月28日、大阪、ザ・シンフォニーホール (④-⑥)

Recording: May 23, Suntory Hall, Tokyo (①-③), May 28, 1990, The Symphony Hall, Osaka (④-⑥)
Producer: Norio Ohga
Recording Director: Masatoshi Sakaida
Balance & Editing Engineer: Ken-ichi Handa

チャイコフスキー:

ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

1874年に着手し、1875年に完成。

当時チャイコフスキーが教授として教鞭を執っていたモスクワ音楽院の院長であり、友人でもあるニコライ・ルビンシテインに献呈しようと考え、作曲を開始した。作曲が進み、いざルビンシテインに聴かせたところ、極めて手厳しくこきおろされ、自分の意見を取り入れて書き直すのであれば演奏してもいい、とまでいわれてしまう。

それを受けたチャイコフスキーは、ルビンシテインへ献呈するという当初の考えを取り下げ、ピアノリストであり指揮者でもあるハンス・フォン・ビューローに初演を依頼することとする。本作を聴いたビューローは独創的だと賞賛し、アメリカのボストンにて、ハンス・フォン・ビューローのピアノ、ベン

ジャミン・ジョンソン・ラングの指揮による初演を行い、大成功を収めた。その後、ルビンシテインはチャイコフスキーに謝罪し、自ら指揮やソリストを務め、本作の演奏を重ねていった。

チャイコフスキーはピアノの協奏曲を3つ残しているが、チャイコフスキーのピアノ協奏曲といえば、一般的には本作を指すほどの知名度を誇る。

第1楽章の序奏はあまりに有名。大変印象的であるが、これは冒頭にのみ出現し、以後現れることはない。本楽章の旋律の一つは、ウクライナの民謡を元にしているといわれる。大きなカデンツァを経て、盛り上がりを見せ、そのまま堂々と幕を閉じる。

第2楽章は弦楽器のピツィカートと、フルートによる牧歌的な旋律によって導かれる。中間部では雰囲気が変わり、おどけたワルツ風の音楽が展開される。

第3楽章は目が覚めるようなティンパニの一撃で開始される。第1楽章と同じく、旋律の一つがウクライナの民謡からきている。結尾部の華やかさと達成感は特筆すべきものであろう。

ラフマニノフ:

ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18

1900年に着手し、1901年に完成。

音楽家として活動が続いていたラフマニノフだが、本作以前は代表作に恵まれず、挫折を味わうばかりの苦悩の時期が続いていた。特に「交響曲第1番」の大失敗は彼の精神に多大なる疲労を与え、一時は創作意欲が全くなってしまったほどであった。そのショックの大きさをや、この交響曲が彼が生きているうちは2度と演奏されることがなかった、ということからも見てとれるだろう。

そんなラフマニノフにとって大きな転機となったのが本作である。初演が大成功を収め、以後作曲家としての地位を確固たるものとしていく。

なお、本作は、長きにわたる精神的スランプを脱するための大きな助けとなった、ニコライ・ダール医師に献呈されている。

物憂げなピアノの和音で開始される第1楽章。これは鐘の音を模しているといわれる。本楽章はフィギュア・スケート女子、浅田真央の演技に使用されたため、近年特に知名度が高い。

第2楽章は第1楽章の盛り上がりか嘘のような静謐さで開始される。ところどころで拍子感がなくなるため、ふわりと宙に浮いたような心地よさがある。

第3楽章は激しさと優しさが交互に現れる劇的な楽章。結尾部ではシンバルが登場し、高い効果を上げている。

中村絃子

1944年、日本生まれ。

3歳で桐朋学園大学音楽科の前身となった「子供の為の音楽教室」第一回生として井口愛子に師事する。なお、同期には小澤征爾がいる。10歳よりレオニード・コハンスキーに師事。

1954年に全日本学生音楽コンクール・ピアノ部門の小学生の部で、1958年には中学生の部で優勝、1959年に第28回日本音楽コンクールにて第1位特賞を受賞するなど、若き頃より才能を存分に発揮。1960年にNHK交響楽団初となる世界一周公演の際のソリストに抜擢される。

その後、日本人として初となる全額奨学金を獲得し、ジュリアード音楽院に進学、ロジャー・レヴィンに師事。

1965年、第7回シヨパン・コンクールで入賞

果たし、同時に最年少者賞を受賞する。

その後は世界中でのコンサート、レコーディング、コンクール審査員など、精力的な活動を行い、日本人ピアニストの代名詞的存在となる。現在は後進の育成にも力を入れている。

エフゲニー・スヴェトラノフ

1928年、ロシア生まれ。

父はボリショイ劇場のソリスト、母はパントマイム劇場のアーティストという芸術一家であった。

モスクワ音楽院に進学し、指揮をアレクサンドル・ガウクに、作曲をユージン・シャポリンに学んだ。1955年、ボリショイ劇場の副指揮者となり、1962年には首席指揮者に就任する。

1965年から1999年の35年間という長きにわたり、ロシア国立交響楽団の首席指揮者を務めあげた。

晩年はロシア以外のオーケストラの指揮台に立つ機会が増えていった。日本においては、NHK交響楽団に客演指揮者として招かれ、日本のクラシック・ファンにロシア音楽の真髄を伝え、多大なる賞賛を受けた。

2002年、モスクワの自宅にて満73歳で没。

本盤に収められている曲はどちらも、日本人である中村が、ロシアの指揮者、オーケストラをバックに、ロシアの大作作曲家の作品に挑んだもの。中村流のチャイコフスキー、ラフマニノフが見事に体现されている。このコンビは本盤の2曲のほか、ラフマニノフのピアノ協奏曲第1番・第3番と「パガニーニの主題による狂詩曲」の録音も残している。

[市原雄亮]

[取り扱い上のご注意] ●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。 ●ディスクが汚れたときは、乾いた柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや消剤等は使用しないで下さい。 ●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。 ●ひび割れや変形、または接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。 [保管上のご注意] ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。 ●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。 ●ケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

ご購入いただいた商品に関するお問い合わせ: 株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント
〒102-8353 東京都千代田区八潮4番地5 phone 03-3515-5111

Sony Music Official Site <http://www.sonymusic.co.jp/>

SICC 2038